

「共観表」の作成にむけて

佐藤 研

私の属する調整班は「本文批評と解釈」、研究分野は「イスラエル学」 対象はとりわけ新約聖書である。その枠内で、「初期キリスト教におけるイエス伝承の変遷史」を描くというのが今回の私の研究計画である。これにはある具体的な「作品」を完成させることが必須のステップとなる。それは、福音書の「共観表」の作成である。

「共観表」(Synopsis)と聞いてもすぐにはイメージが湧かない方も多いかも知れない。これは、新約聖書の諸福音書を、様々な共通単位 「イエスの受洗」だとか、「ゲツセマネの祈り」だとか に沿って本文を横並びにし、相互に比較できるようにしたものである。「共に(並べて)観る」ことが出来るというので、「共観表」と名付けられている。なぜこのようなものが大切かと言えば、これを使えば福音書間の文書の異同関係が鮮明に分かるためである。現在の段階の福音書研究においては、四福音書のうちマルコ福音書が最古であること(紀元70年代成立)、およびマタイ福音書およびルカ福音書の著者たちが各々そのマルコ福音書(の写し)を入手し、それを目の前で参照しつつ、自らの福音書をそれぞれ独自に書き上げたこと(紀

元80年代)は定説になっている。とすると、マタイやルカが、マルコのどの部分をどの様に変更して受容したか、これが「共観表」を検討すると見やすい形で浮かび上がるのである。さらには、マタイとルカが、マルコとは別のある大きな文書を第二の資料として使ったことも判明しているので、マルコにはなく、マタイとルカにのみ存在する小単元を拾い、言葉を検討していくと、この「幻の資料集」 一般に「Q文書」と呼ばれる をかなりの確率で再構成することも出来るのである。

もちろん、そうした作業の土台となる「共観表」自体は、新約聖書学の分野ではとうの昔に完成している。諸福音書を並べて印刷するだけであるから、原理的には易しい作業のはずである。現在ある最高のギリシャ語共観表は、Kurt Alandが作り改訂を加えたSynopsis Quattor Evangeliorumである。新約学のうち、特に福音書研究にたずさわる者は、このAlandの共観表を基に様々なテキスト観察を行なっているわけである。おそらく各自がその本文に下線を引いたり、蛍光マーカーで部分的に染めたりして、作業しているに相違ない。だとしたら、この共観表をコンピューター用のテキストにしたら便利であろうことは、誰でも想像できよう。検索が瞬時に出来るだけでも、大きな意味がある。しかし、コンピューター用の聖書プログラム(本文、辞書、多数の翻訳を含む)自体はすでに数多く登場しているものの、ギリシャ語共観表はまだどこにも登場していないようである。したがって、私はまずこれをコンピューターに載せようと思う。

もちろん、これだけでは余りにもプリミティブである。そこで計画しているのは、先ほども挙げた、マル

コ、マタイ、ルカの間テキストの異同を一目瞭然にするべく、様々なレベルの共通な単語をすべて色刷りにして表すことである。

つまり、ある単元において、マルコ、マタイ、ルカの共観福音書三書（ひとまずヨハネ福音書は独自の系統なのではずしておく）がすべて共通に使っている単語を 例え 「青」で染める。また、マタイとマルコのみが共通している部分を「緑」に彩色し、マルコとルカのみが共通する部分を「赤」で染める。そしてさらには、マルコには対応物がないところの、マタイとルカにのみ共通の部分を「黄」色で塗る。すると、これだけでも相当のことがヴィジュアルに鮮明となる。つまり、そのように染色された共観表の中で、「青」の部分と「緑」の部分を加えると、マタイがマルコから受容した部分の総体が瞭然となる。同様に、「青」と「赤」をたせば、ルカがマルコから受け入れた部分の一切の単語と文とが浮かび上がる。それだけではなく、マタイとルカがそのようにマルコを受容した際の「編集意図」まで、容易に読みとれるようにディスプレイされることになる。また、マタイとルカのみに共通の言葉の層は、先に述べた「Q文書」に属するものが大部分であるが、それもすべて「黄」で示されることになり、この幻の資料集の正確な文言を再構成しようとする際の大きな助けとなる。もちろん、コンピューターを使えば色を出すだけではなく、消すことも簡単にプログラミングが出来るので、使い勝手はかなり高いものになることが予想される（幸い、若いプログラマーの協力を得られることになった）。

ところで、この「色分け」戦術はこれだけに尽きない。ヨハネ福音書も、共観福音書との並行例がある箇

所においては、登場願う。そして目で見てその並行関係が容易に把握できるよう、独自の仕方では彩色する。さらには、「イエスの言葉」は、正典福音書の後も、部分的に「使徒教父文書」や「初期教父」たちの文書、その他「新約外典」にも登場する（以上紀元二世紀を主体とする）。それらと四福音書との間に並行関係がある場合、これも共観表の欄外に色刷りをして載せる。特に最近注目されている「トマス福音書」（二世紀中頃のグノーシス派の福音書）との多数の並行関係も、それをコプト語からギリシャ語に逆翻訳したものを掲載して再び「色」で表示する。これで文字通り「色々」と利用価値の高いツールができあがる。

ただし、これでは専門家用の道具でしかないことになる。そこで、以上のギリシャ語原文版と並んで、日本語版を出す。それは特に、書物形態とCD-Rom形態の二様にするつもりであり、書物形態のものに関しては、既に或る出版社と交渉が成立している。現段階でも、共観表を作ることを前提にした福音書の新訳はほぼ完成しており、これを基に作業を進めるつもりである。こうして、ギリシャ語版を使った場合のように厳密なもの作れなくとも、かなりの近似的な正確さを主張できる邦語版が出来上がれば、一般の読者や関心層にとっても意味あるものとなるのではないかと期待している。

後は、提出した研究計画が受理され、段階的な作業を 既に一部はスタートさせているので 本格的に開始するのを待つことである。

（A02「本文批評と解釈」班・立教大学）